

一句単独の部

【最優秀賞】

オーウェルに時奪われし五月闇

小林 千律菜

【優秀賞】

つり革に指一本やつばくらめ  
節分の夜鬼たちのゆくところ

伊藤 葉奈  
佐藤 詠人

【佳作】

囁の夏の校舎の管楽器  
蝉ないて塩素香った午後の授業  
白驟雨行く手は見えぬ孤独かな  
空蝉に残る湿度よ雲がゆく  
スクランブル交差点や木の芽晴れ  
鍬入れて蜻蛉の来たる畑かな  
河童忌や葉落として藪の中  
蠟梅の香り纏いし祖父の墓碑  
夏の果100光年の闇想ふ  
夏祭り行燈色の町の空

大熊 梓遠  
大槻 千華  
風間 瑠海  
神尾 雛子  
佐藤 秋雅  
鈴木 駿大  
高橋 瞬次  
村田 陽代莉  
矢部 優希  
吉田 有沙

複数句の部

【最優秀賞】

裏庭 南 幸佑

髪ながき少年冬の来たりけり  
冬日差す机の長き図工室  
外套に潜りもそもそ動くもの  
星の子の眼の眠さうに聖夜劇  
カーテンの襞あけましておめでたう  
校庭の霜へ朝日のまつすぐに  
豹の目の爛々とある吹雪かな  
体育館の壁にマットや日脚伸ぶ  
杭のまはりに薄氷の集まれる  
制服の釦かちやりと牡丹雪  
啓蟄のパンに染みゆくミルクかな  
春は詩の季節なりけり窓辺に陽  
やはらかく若草石を撥ねかへす  
裏庭の古巢のことを心から  
囀やふくふくとして釈迦の鼻  
卓球台を水面と思ふ蝶の昼  
風船売煙草啜へてゐたりけり  
芽吹きをり涙の湧いてくるやうに  
朧夜の大きく揺るる梢かな  
ミニカーに乗客のなし春の暮